

旅する工具屋



第九話：72時間限定の入国，極寒の春

駐在員としての任期が終わりに近づき帰任が現実的に見える距離まで近づいて来た頃、私は毎日家に帰ると行き逃した旅行先を洗い出して残された時間の使い方を考えました。主立った場所に関してはほぼ行き尽くしていましたが、唯一手つかずで残っていたのがロシアでした。

行き先を絞り、フライトやホテルを調べると日本人は入国にビザが必要との事。しかし日本に居ない私はドイツの就労ビザで申請する必要があり、不幸にも私のビザは取得条件の1つである「残存期間6か月以上」を満たしていませんでした。大使館から拒絶査定を受け、さすがに今回はギブアップかと思っていた矢先、思わぬ入国方法を記した記事に出会いました。

ヘルシンキかタリンから指定の船便で入国し、ほかいくつかの条件を満たせばビザ無しでも72時間以内ならサンクトペテルブルクに滞在できるとの事。この方法しかないと思った私はすぐに船とフライトを予約し、1か月後の3月にヘルシンキへ飛びました。街を足早に抜けてトラムで港へ行くと、そこには大きな船が停泊していました。

カウンターで受付をして船内へ。定刻に出港した船は一路東へ進みます。船内のレストランで食事をしつつフィンランド湾の夕暮れを眺め、明日入国できる事を願い、市内の地図を眺めてサンクトペテルブルクに着いた後の行動を思い浮かべながら眠りに就きました。

翌朝は、目覚ましが鳴る少し前に大きな音で目覚めました。最初は船に異常でもあったのかと思いましたが、窓から外を見てすぐに状況を理解しました。海に氷が張っていて、船はそれを割り・押し除けながら進んでいるのです。朝陽に照らされた氷の海は、自分が今ロシアに近い事を感じる印象的な目覚めとなりました。



港に着くと、いよいよ緊張の入国審査です。パスポートのチェックが始まると、やはり私の場合は少しいレギュラーなケースだったようで数人での話し合いが始まりました。しかし結局スタンプは無事に押され、私は晴れてロシアへ足を踏み入れる事ができました。それと同時に72時間のカウントダウンが始まったのです。

入国後はシャトルバスで街中へ。解読不能な文字や、どこことなく排他的な雰囲気緊張感が高まりましたが、そんな事よりも私が直面していた問題は他にありました。約マイナス20℃という気温に対して、私の装備はあまりに不十分だったのです。

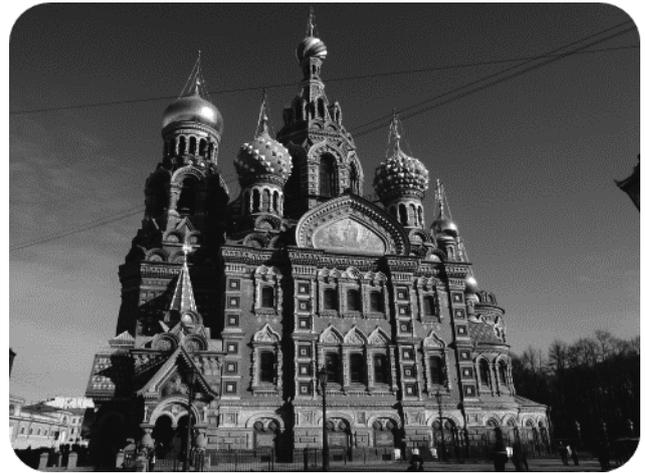
刺すような冷たい空気，凍った地面，流れていない川(そのまま上に立てました)，これまで体験した事の無い寒さは容赦なく私を痛めつけました。足元の寒さは靴下を重ね履きし，耳の痛みはフードを被る事で何とかかなりましたが，どうにもならなかったのが手袋です。ニットの手袋は網目の間から冷気を通し，手は瞬く間に冷え切ってしまいました。

逃げ込むようにエルミタージュ美術館に入り，鑑賞しながら「これはまずい，身体がもたない」と考え込みましたが良い打開策も無く再び外へ。しばらく歩いて寒さに耐えかね，古い喫茶店に入りました。何も頼まず暖を取るのも忍びないので紅茶でも…と思いましたが英語が全く役に立ちません。

この「役に立たなさ」は他国と少し意味合いが異なり，英語が通じないのではなく英語に対して拒絶反応に近いものがあります。聞いた瞬間に固まり，首を振られ，話が進まないのです。そんな時，ロシア語で唯一言える飲み物を思い出して試してみました。「ウォッカ」です。

この魔法の飲み物は，英語を使わずに注文ができ，安上がりで，手先まで血が行き渡ります。外を歩けば寒さで酔いませんし，ロシアを歩く事が楽しくなります。寒さを我慢できない時は駆け込んでウォッカ，この繰返して私のロシア旅行は格段に輝きを帯び始めました。

血の上の救世主協会，聖イサク大聖堂，スモルニー修道院，カザン聖堂の様な名所をはじめ，豪華絢爛な工カテリーナ宮殿(特に琥珀の間)，チフヴィン墓地に眠るドストエフスキーを巡る頃には随分寒さを凌げるようになっていました。買い物やレストランでのやり取りもコツを覚え始め，達成感に近い何かを感じていたので。



72 時間のタイムリミットでもある最終日に，地下鉄の駅の入り口が分からず困る場面がありました。数人話しかけた結果，たまたま英語が少し話せる男性を見つけて場所を教えてもらいましたが，どこか違和感というかズレた感じが拭えません。原因はすぐに分かりました，彼はとてつもなく薄着だったのです。

早く地下鉄の駅に潜り込んで凍死を免れたい私とは全く異なり，彼は「普通に」外にいました。そこは観光客が少ないローカルな場所だったのですが，街行く人々はスプリングコートのような薄手の上着を着て，帽子も手袋もしていない人すらいます。私が抗い，戦ってきた極寒の場は彼らにとって春なんだと気づき唾然としました。

真冬はマイナス 50℃を下回る日もあり，流石に「外は寒いから」地下鉄で通勤するそうです。もはや寒いと思う事さえ恥ずかしく感じられた私はちょっと無理をしてフードを外して帰路へ。船は再び氷を割りながら出港し，慣れ親しんだ欧州の春へと私を連れ戻してくれました。

ロシアはどうだった？と聞かれて「寒かった」と答えるとほぼ 100%の確率で笑われますが，どうか一度行って見て下さい。きっと笑えなくなるはずです。

文：ペンネーム 17chandler